

過疎地中学校の性教育の現状分析から過疎地中学校のセクシュアリティ教育構築への提言

Suggestion for Build the Program of Sexuality Education at Junior High School in Certified Underpopulated Area

西頭 知子¹⁾, 佐々木 くみ子¹⁾, 佐々木 綾子¹⁾, 末原 紀美代²⁾

Tomoko Nishito¹⁾, Kumiko Sasaki¹⁾, Ayako Sasaki¹⁾, Kimiyo Suehara²⁾

キーワード: 過疎地中学校, 中学校教師, 性教育

Key words: junior-high school in certified underpopulated areas, junior high-school teachers, sex education

抄録

本研究は、過疎地中学校の性教育の現状と性教育に関する教師の考えを明らかにすることにより、思春期に親元を離れる子どもたちへの効果的なセクシュアリティ教育プログラムを検討することを目的とした。過疎地中学校の教師を対象に質問紙調査を行い、有効回答が得られた45名(100%)を分析対象とした。得られた結果は以下のとおりである。

1. 性教育を実施している教師の約半数が、生徒の今後の性行動に対する不安と、教育環境・教育内容の不十分さから、現行の性教育は十分でないと評価していた。
2. 担当する教師の意識の差により、性教育の実施内容が大きく異なっている可能性が考えられた。
3. 性教育の実施経験をもつ教師の半数が、実施に際して困難感・戸惑い・サポートの必要性を感じていた。
4. 教師の約6割は、生徒の言動における性に対する不適切さや認識の軽さから、性教育の必要性を感じていた。
5. 教師は、生徒のコミュニケーションスキルのための教育や情報教育についての必要性を感じており、性教育を包括的に捉えていることが窺われた。

Abstract

The objective of the present study was to obtain indicators for investigating effective sexuality education programs for children who leave their parents during adolescence by elucidating the current condition of sex education and the thoughts of teachers on sex education at junior high schools in certified underpopulated area. A questionnaire survey was conducted on teachers at junior high schools in certified underpopulated area, and the valid responses obtained from 45 subjects (100%) were analyzed. The results were as follows:

1) 大阪医科大学看護学部 Osaka Medical College Faculty of Nursing 2) 兵庫医療大学看護学部

1. Approximately half of the teachers providing sex education assessed the current sex education as insufficient due to concerns regarding students' future sexual behavior and inadequate educational environments and contents.
2. The contents of sex education implemented may vary greatly depending on differences in the awareness of the teacher in charge.
3. Half of the teachers with experience providing sex education felt a sense of difficulty, confusion, and the need for support during implementation.
4. Approximately 60% of teachers felt the need for sex education due to the students' behaviors, which were inappropriate and lacking in awareness in regard to sex.
5. Teachers felt the need for education for promoting the communication skills of students and media literacy education, and viewed sex education from a comprehensive standpoint.

I. はじめに

学校の性教育においては、「なかなか定着しない日本の現状を考えると、セクシュアリティ教育の提示する課題を性の学習においてより明確に位置付けることは重要」(人間と性教育研究協議会, 2006)であり、これは「つまり、性をめぐる人間関係や社会的背景を性教育の中心的な問題として位置づけるということ」(人間と性教育研究協議会, 2006)との指摘がある。このような包括的セクシュアリティ教育は、「ヒューマン・セクシュアリティのあらゆる側面に関連する知識、態度、技術と価値観を変革してゆくもの」であり、学校での包括的セクシュアリティ教育は、「個人の生涯を通じたセクシュアル・ヘルスの礎石になるもの」(PAHO, WHO, 2003)である。中学校学習指導要領においても、“異性の尊重”“情報への適切な対処”“行動の選択”について取り扱うものとすることが明記されている。すなわち、包括的な性教育の実施が求められているといえるが、その取り組みの具体化は各学校の裁量となっていることから、結果的に全く取り上げない学校もでてしまうことが指摘されている(橋本, 2010)。

包括的な性教育の概念は30年以上前から唱えられてきたことであり、先行研究(山本他, 1991)では、性教育の目的が、ただ単に性知識やある一定のモラルを身につけさせることであったのが、昭和50年代後半以降は、個人が1人の性的人間としてアイデンティティを確立し、適切な性行動ができるよう

になることに変わってきたと述べられている。また、同研究において、学校で性教育が定着しない理由は、①性教育の概念や位置づけがはっきりされていない(教育課程のなかのどの教科のなかで扱うか、どのような状態で進めるのか等)、②指導に携わる教師側の問題(教員志望の学生が持ち合わせている知識は生理面に偏り、系統だったものではないこと等)、③家庭や地域社会の受け入れ方の問題(前提として学校内で全教師が性教育の意義について正しく理解し共通理解をはかる必要がある)、の3つに大きく分けられると考察されている。これらの課題は未だ解決しておらず、先行研究のアンケート調査の結果、中学校の教師の7割が性教育に苦手感を持っていたことや(鈴木他, 2005)、小・中学校の性教育の実態調査において、性教育推進の課題として職員全員の意識改革や、教員間で指導に温度差があること等が挙げられていることから窺える。

近年、社会的な問題として認識されている若年の親による子ども虐待や、20代女性の子宮頸がん罹患者の著しい増加等も、その背景に、性交開始年齢の低年齢化やリスクの高い性行動等をもっており、学校現場における性教育の充実が急務の課題であると言える。とりわけ、進学等の理由で学生時代に親元を離れる子どもたちは、家族の監視・統制から離れ、規範が得られにくい環境で過ごすことから、性行動におけるハイリスク群になる可能性があるといえる。

日本には国土の特徴からへき地が多く、へき地校

指定の中学校は、約 1,200 校存在する。これらの中学校では、高校進学時に親元を離れる生徒も少なくない。生徒たちは、性行動が活発化する高校生活を家族の監視・統制から離れて過ごすことになる。しかし、過疎地中学校における性教育の現状に関する報告はみられない。本研究は、過疎地中学校で実施されている性教育の現状と、性教育に関する教師の考えを明らかにすることにより、思春期に親元を離れる子どもたちへの効果的なセクシュアリティ教育プログラムを検討するための示唆を得ることを目的とした。

II. 研究方法

1. 研究対象

A 県 B 郡内で、過疎認定地域に指定されている 10 町村にある公立中学校 14 校（生徒総数約 770 名、教師総数約 60 名）のなかで、学校長の了解が得られた 6 校に勤務する教師 47 名。

2. 調査方法

調査には無記名自記式質問紙を用いた。質問紙は、研究協力依頼文書と返信用封筒を添付して各中学校宛に郵送した。回答後は、回答者自身が添付の封筒に入れて厳封したものを学内で回収し、一括郵送するよう依頼した。質問紙の返信をもって研究への同意とした。調査は平成 21 年 6～9 月に実施した。

3. 主な調査項目

調査項目は、先行研究（日本性教育協会、2007）の質問内容を参考に作成した。回答は選択法および自由記述とした。質問は、属性、性教育の実施状況について 4 問、性教育の実施経験について 2 問、望ましいと考える性教育 2 問、伝えたい内容 2 問、中学生の性行動について 1 問、性教育の必要性について 2 問等で構成した。回答の形式は、選択肢と自由記述であった。

4. 分析方法

数量化したデータは記述統計と χ^2 検定、直接確率検定による解析を行った。統計処理には SPSS17.0 を用いた。また、自由記述内容は、①研究目的に対する回答ひとつのみを含む句、文章を記録単位、1 人の回答全体を文脈単位とした。②記録単位の意味

内容を損なわないように簡潔な一文にコード化した。

③コードの意味内容から同質性・異質性に基づいて分類集約し、カテゴリーとして意味内容を示す言葉を命名した。④正確性の確保のため、プロセス全体において研究者間で合意が得られるまで検討した。

5. 倫理的配慮

研究は、大阪府立大学看護学部研究倫理委員会の審査を受けて実施した（承認番号 20-69）。実施に際し、事前に県教育委員会と各学校長に研究の説明を行い、承諾を得た。回答は無記名とし、封筒にいれ厳封したうえでの回収によりプライバシーの保護に配慮した。また、対象者には、調査は自由協力であり拒否しても不利益はないこと、調査票は厳重に保管し研究終了時には処分することを紙面で説明した。

III. 研究結果

調査には 45 名（回収率 95.7）が協力し、全てを分析対象とした。教師の年齢区分は、20 代 22.2%，30 代 6.7%，40 代 31.1%，50 代 37.8%，60 代 2.2%であった。教師経験年数は、“5 年未満”22.2%，“5 年以上 10 年未満”8.9%，“10 年以上 15 年未満”4.4%，“15 年以上 20 年未満”11.1%，“20 年以上 25 年未満”13.3%，“25 年以上 30 年未満”4.4%，“30 年以上”35.6%であった。

1. 性教育の現状

1) 現行の性教育の実施状況

実施されている性教育の形態は、“学年単位・男女合同”40.0%が最も多く、次いで“クラス単位・男女合同”26.7%であった。その他 22.2%では、「内容によって異なる体制」「全校で」「必要な時に必要な生徒個々に話をする」「保健体育の授業で触れていると思う」「学校全体が計画的に“性教育”としてはしていない」「特に行っていない」等であった。

実施者は、“保健体育担当教師”93.0%，“養護教諭”44.2%，“クラス担任”27.9%，“専門職（医師、保健師、助産師、看護師）”23.3%，“その他”4.7%であった。その他では、“（生徒が）話しやすい先生”“（親しい）先生”“各教科担任”が挙げられた。

内容（図 1）は、“男女のからだの違い・仕組み”83.8%，“妊娠のしくみ”62.2%，“性感染症/HIV の知識”59.5%、

“男女の心の違い”59.5%，“恋愛について”32.4%，等であった。その他の自由記述は，「性の自己決定能力」「生き方」「望ましい男女交際」「男女の協力のあり方」「心の発達」「セルフエスティーム」「把握していない」「詳細は不明」等であった。

2) 現行の性教育の評価

現在，中学校で行われている性教育が生徒にとって十分なものであるか（実施頻度，内容，方法等において），との問いには，全体の半数以上 55.6%が“十分でない”と答えた。

その理由については，15 文脈から 22 コード，2 個のカテゴリーが得られた。2 個のカテゴリー名は，「生徒の今後の性行動に対する不安」「教育環境・教育内容の不十分さ」であった（表 1）。以下，カテゴリーを「」，サブカテゴリーを「」，具体的な記述内容を「」で示す。

「生徒の今後の性行動に対する不安」のカテゴリーは，「性に関するかたよった情報が身近に多くある」「妊娠・中絶をする高校生が多い」などの「生徒を取り巻く現状」と，「親元を離れてからが不安」「卒業後のために妊娠について伝える必要がある」などの「中学校卒業後の性行動への不安」から抽出された。「教育環境・教育内容の不十分さ」のカテゴリーは，

「十分な（授業の）時間数の確保ができない」「（授業の）時間数が少ない」などの「授業時間数の不足」，「組織的に行われていない」「計画的に行われていない」「どの程度の教育が望ましいか明確でない」などの「教育計画の不足」，「内容の深まりが足りない」「保健体育の教科指導が中心である」「正しい情報を選択する力をつけるには不十分」などの「教育内容の不足」，「恥ずかしがって教員が語らない」との「性教育に対する教師の羞恥心」から抽出された。

現行の性教育が生徒にとって“十分である”と答えたのは 24.4%であり，その理由については，7 文脈から 11 コード，2 個のカテゴリーが得られた。2 個のカテゴリー名と人数は，「現行の性教育に対する自信」（1 名），「科目教育としての十分さ」（6 名）であった（表 2）。「現行の性教育に対する自信」のカテゴリーでは，「学年に応じて実施している」などの「段階的な教育の実施」，「子どもたちが（性教育を）楽しみにしている」などの「生徒の性教育に対する前向きな反応」，「必要以上の情報はかえって心配」などの「現行の教育における内容の適切さ」等，5 つのサブカテゴリーから抽出された。「科目教育としての十分さ」のカテゴリーは，「これ以上増やすと他（の内容）ができない」「保健は性教育だけでは

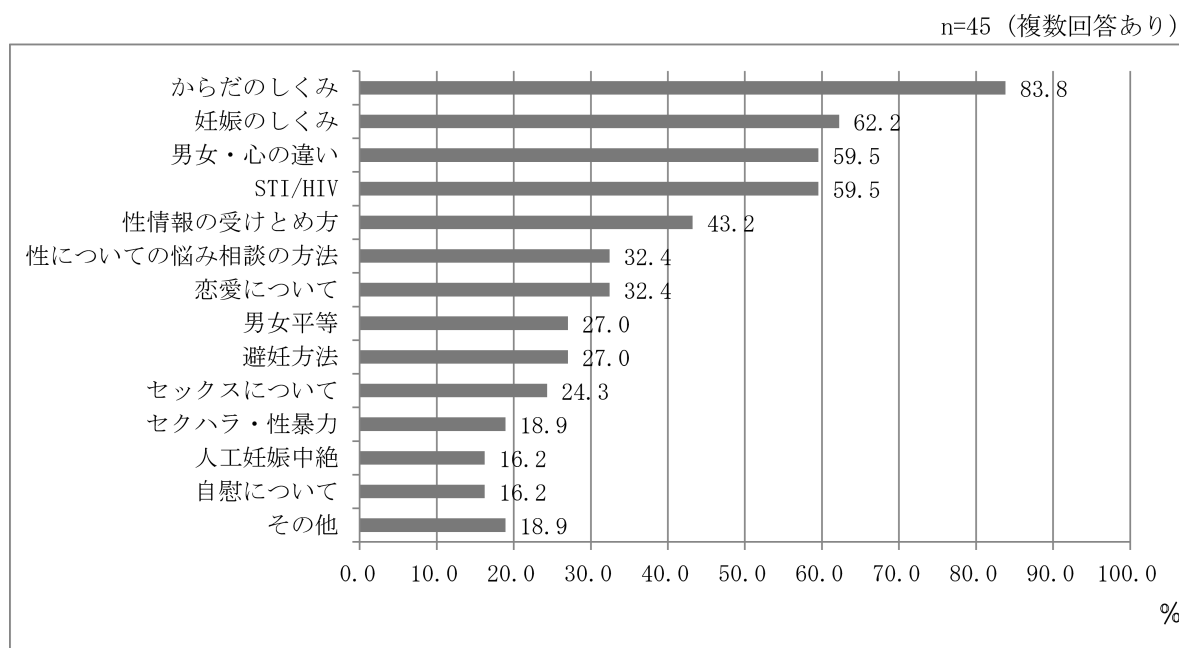


図1 現行の性教育の内容

表1 現在の性教育が生徒にとって“十分なものでない”と思う理由

カテゴリー	サブカテゴリー	具体的な記述内容
生徒の今後の性行動に対する不安	生徒を取り巻く現状	性に関するかたよった情報が身近に多くある 妊娠・中絶をする高校生が多い 性病の怖さを知らせる必要がある
	中学校卒業後の性行動への不安	親元を離れてからが不安 卒業後のために妊娠について伝える必要がある
教育環境・教育内容の不十分さ	授業時間数の不足	十分な時間数の確保ができない 頻度が少ない 丁寧に教える必要がある
	教育計画の不足	組織的に行われていない 計画的に行われていない (学年で) 積み重ねた指導ができていない 系統的に行われていない どの程度の教育が望ましいか明確でない
	性教育に対する教員の羞恥心	恥ずかしがって教員が語らない
	教育内容の不足	知識を与えるだけではない (不十分) 知識を与えるだけでなく問題行動が減少するような方法 (が必要) 内容の深まりが足りない 「保健体育」の教科指導が中心である 情報量が少ない 正しい情報を選択する力をつけるには不十分 (教育内容を) きれいごとで終わらせてしまっている (子供たちが) 知識を自分のこととして捉えにくいようだ

表2 現在の性教育が生徒にとって“十分なものである”と思う理由

カテゴリー	サブカテゴリー	具体的な記述内容
現行の性教育に対する自信	十分な時間数の確保	理解するには十分に実施している
	段階的な教育の実施	学年に応じて実施している 3年間を通して行っているので十分と思う 知識 (男女のからだ、妊娠等) の学習をした後、性と生について学習している
	教育方法の工夫	ピア教育を活用している
	生徒の性教育に対する前向きな反応	子どもたちが (性教育を) 楽しみにしている 生徒たちが (性教育を) 真面目に受けとめている
	現行の教育における内容の適切さ	必要以上の情報はかえって心配 現行の知識ぐらいが丁度よいと考える
科目教育としての十分さ	科目教育の一部としての十分さ	これ以上増やすと他 (の内容) ができない 保健は性教育だけではない

ない]との記述内容から抽出された。

その他の回答としては、[保健体育でしているのかわからない][どのような内容を教えているかわからない]等であった。

2. 教師の性教育実施の経験と性教育の必要性

1) 教師の性教育実施経験と実施に際する困難感・戸惑い

教師の 66.7%が性教育実施の経験を持っていた。内容は(図2)“男女のからだの違い・仕組み”76.7%，“男女の心の違い”73.3%，“妊娠のしくみ”56.7%，“性感染症・HIVの知識”50.0%，“恋愛について”50.0%等であった。

実施経験者に、実施に際して困難感や戸惑い、サポートの必要性を感じるか聞いたところ、47%の教師が「感じる」と答えており、年齢・経験年数による有意差はなかった。

困難感・戸惑いの内容については、17文脈から24コード、3個のカテゴリーが得られた。3個のカテゴリーは、《教師の性教育実践力の不足感》、《教師の性教育に対する消極的な態度》、《生徒の性意識と態度の個人差》であった(表3)。《教師の性教育

実践力の不足感》のカテゴリーは、[性の深さを伝えたいが伝え方が難しい][異性にはからだのしくみをわかりやすく具体的には伝えにくい]などの《教育方法の難しさ》、[保健体育の授業では、指導要領よりはみ出すことはできない][どこまで性の知識を教えてよいか]などの《教育内容の選定の困難さ》、《教師自身の知識の不足》から抽出された。《教師の性教育に対する消極的な態度》は、[若いころは自分自身が性をタブー視していた][生徒・保護者に不信感を抱かせ信頼を損なわないか]などの《教師の不安定な性意識》と《(教師間における)性教育への取組の差》から抽出された。《生徒の性意識と態度の個人差》は、[子どもたちがどう考え、どう感じているのかわからない][おもしろ半分でうける生徒がいるのではないか]などの《生徒の性に対する態度の不明確さ》、その他《生徒の発育・発達の個人差》《生徒間の性意識の差》の3つのサブカテゴリーから抽出された。

必要とするサポートの内容については、4文脈から4コード、2個のカテゴリーが得られた。2個のカテゴリーと人数は、《異性教師のサポート》(2名)、

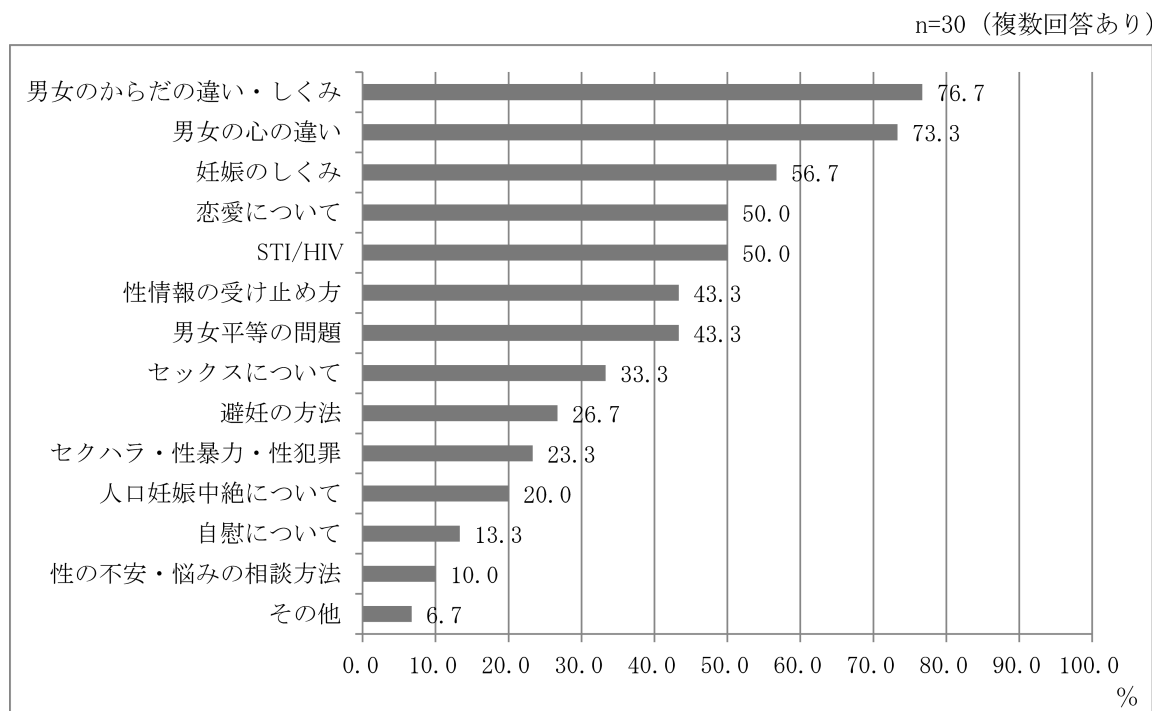


図2 実施したことのある性教育の内容

表3 性教育の実施に際して感じる困難感・戸惑い

カテゴリー	サブカテゴリー	具体的な記述内容
教師の性教育実践力の不足感	教育方法の難しさ	心身ともに発育に個人差が大きいので指導の難しさを感じる 性の深さを伝えたいが伝え方が難しい ビデオ・パワーポイントを使用するなど工夫しているが難しさを感じる 効果的な性教育の取り組み方 生徒の実態に合う教材の選択 異性にはからだのしくみを分かりやすく具体的には伝えにくい 男女混合で戸惑いを感じた
	教育内容の選定の困難さ	(生徒の発達状態が異なるので) 指導内容を決定するのが難しい 授業内容が単調になってしまう 保健体育の授業では、指導要領よりはみ出すことはできない どこまで性の知識を教えてよいか
	教師自身の知識の不足	自分自身の知識が不十分なので少し不安がある
教師の性教育に対する消極的な態度	教師の不安定な性意識	若い頃には、自分自身が性をタブー視していた 生徒や保護者に不信を抱かせ信頼を損なわないか等の戸惑いがあり苦慮したことがある
	(教師間における) 性教育への取組の差	(以前実施した時) 1年生の教師は性教育に前向きであったが、他学年はそうでもなかったため、学校全体の取組にはできなかった。
生徒の性意識と態度の個人差	生徒の性に対する態度の不明確さ	男子が興味本位に捉える傾向が強い 男子が女子の反応に過剰に関心を示す 女子は恥ずかしがって消極的な授業態度になる 子どもたちがどう考え、どう感じているのかわからない おもしろ半分でうける生徒がいるのではないかと不安になる
	生徒の発育・発達の個人差	心身ともに発育に個人差が大きいので(指導の難しさを感じる) 生徒の発達状態が異なる(ので指導内容を決定するのが難しい)
	生徒間の性意識の差	男女のセックスに対する意識の違い 生徒のセックスに対する意識の差が大きい

《専門家のサポート》(2名)であった。《異性教師のサポート》は、[男性が指導する場合は女性、女性が指導する場合は男性のサポートが必要である][異性の学生の場合は異性職員と一緒にいてくれることをのぞむ]との記述内容から、《専門家のサポート》は[より専門的に科学的に理解させたい時に専門の先生に居てもらえたらと思う][助産師、学校外の人、専門家の話を聞くことで素直に受けとめられる]との記述内容から抽出された。

2) 性教育の必要性

生徒との日常の関わりにおいて、言動や様子から性教育の必要性を感じるかとの問いに“感じる”と答えたのは57.8%，“感じない”と答えたのは28.9%であった。必要性を感じる理由については、18文脈か

ら32コード、7個のカテゴリーが得られた。7個のカテゴリーと人数は、《性の認識の軽さ》(5名)、《未熟な性意識》(2名)、《未熟なコミュニケーションスキル》(4名)、《一部生徒の性行動の現状》(3名)、《性への関心の増大》(3名)、《性情報の選択の困難さ》(4名)、《正しい性認識への期待》(3名)であった(表4)。《性への認識の軽さ》は[セックスについてあまりにも軽く考えている][セックスについて興味本位で思っている]など<性行動に対する軽い考え>と[性について軽く発言している][性交について軽い行動が見受けられる]など<性に関する不適切な言動>の2つのサブカテゴリーから抽出された。《未熟なコミュニケーションスキル》は[男子生徒の女子生徒に対する威圧的な

表4 生徒との日常の関わりから性教育の必要性を感じる理由

カテゴリー	サブカテゴリー	具体的な記述内容
性の認識の軽さ	性行動に対する軽い考え	セックスについてあまりにも軽く考えている セックスについて興味本位で思っている セックスを簡単に考えているようで 性の逸脱行為をしていることについて軽く考えている
	性に関する不適切な言動	性について軽く発言している 話をおもしろくしようとして、性について言葉にする (性に関する) 興味本位な発言を聞く 性交について軽い行動が見受けられる (異性からの性的な内容を含むメールに対して) 反応の仕方が相手を調子に乗らせるようでこわい
未熟な性意識	性意識の発達の遅さ	幼い心の子が多く社会への(心の)準備ができていない 中学生になっても平気で男女が抱き合っている 中学生になっても平気で異性の前で着替えたりする
未熟なコミュニケーションスキル	異性との好ましくない接し方	男子生徒の女子生徒に対するからかい方 男子生徒の女子生徒に対する威圧的な関わり方 男女互いの人権を認めた発言に欠く
	コミュニケーション能力の低さ	互いの人格を認めないような言動 自他を大切にしない言動から
性への関心の増大	性への関心が増大する時期	成長期には心身の発達にあった指導が必要と考える 子どもたちの興味、関心が一番多い時期なので (性に関して) 興味が大きい 相手を傷つけないために必要だと思う
正しい性認識への期待	性に対して正しい認識をもつことへの期待	セックスをいやらしいものとしてとらえている状況がある (性に関して) 正しい見方をもてるように 自分の身体を大切にするために必要だと思う 相手を傷つけないために必要だと思う
一部生徒の性行動の現状	一部の生徒の進んだ性行動の現状	卒業生から性的な内容を含むメールを受け取ったなどの相談を受ける 一部の生徒に性の逸脱行為をしている子がいる 個人的に(性に関する) 指導を実施している 男女交際が低年齢化してきている
性情報の選択の困難さ	性情報の氾濫	性情報が氾濫している 男子生徒はアダルトビデオの世界を現実として捉えているように感じる 子どもたちに性に関する間違った情報が伝わっている (性に関して) ことばだけの情報になっている

関わり方]等<異性との好ましくない接し方>、[互いの人格を認めないような言動][自他を大切にしない言動]等<コミュニケーション能力の低さ>の2つのサブカテゴリーから抽出された。その他、[性情報が氾濫している]こと等から<性情報の選択の困

難さ>、[セックスをいやらしいものとしてとらえている状況がある]こと等から<正しい性認識への期待>のカテゴリーが抽出された。

IV. 考察

1. 対象の属性

教師の年齢区分では、40～50代が全体の約7割68.9%を占めており、全国中学校教師数の構成比(20代9.7%, 30代24.1%, 40代38.1%, 50代27.0%, 60代1.2%)と同様の傾向であったが、20代の占める比率が多いという特徴があった。

1. 過疎地中学校における性教育の現状

1) 性教育の実施内容

実施内容は、からだの生理や性感染症について等、中学校学習指導要領に準じた内容が多く挙げられた。その一方、自由記述では[性の自己決定能力][心の発達][セルフエスティーム]等、性教育を広くとらえた内容が挙げられた。また、[把握していない][詳細は不明]等の回答もあり、教師の意識の差により、実施内容が大きく異なっていることが窺われた。実施は複数の教師で担当されていたが、主には保健体育担当教師が実施しておりクラス担任で実施しているのは3割に満たず、性教育が教師の裁量にまかされている現状が示された。

2) 性教育の実施経験

実施に関しては、教師の約7割が実施経験を持っていたが、その約半数が実施に際して困難感や戸惑い、サポートの必要性を感じていることが明らかになった。年齢や経験年数に関わらず半数もの教師が困難感や戸惑いを感じていることから、教師が効果的な性教育実施の経験を積めていないことや、性教育に取り組もうとする意識が低いこと等が考えられた。教師は、指導方法や指導内容選定の困難さ、自身の性教育に関する知識不足から実践力に不足感があり、また、教師自身の不安定な性意識や、教師間の性教育への取り組みの差から、積極的に取り組めず実施に戸惑っていることが窺われた。自由記述による困難感・戸惑いの内容には、[異性にはからだのしくみをわかりやすく具体的には伝えにくい][どこまで性の知識を教えてよいか][若い頃には自分自身が性をタブー視していた][生徒や保護者に不信を抱かせ信頼を損なわないか]等の戸惑い等、狭義の性教育の内容に限局した内容が挙げられた。

3) 現行の性教育の評価

このような現状で実施されている性教育について、半数以上の教師が《生徒の今後の性行動に対する不安》と《教育環境・教育内容の不十分さ》から、“現行の性教育は十分でない”と評価していた。《生徒の今後の性行動に対する不安》では、生徒を取り巻く社会の現状を鑑みた意見や、近い将来の不適切な性行動を防げるような教育の不足を指摘していた。《教育環境・教育内容の不十分さ》では、[どの程度の教育が望ましいか明確でない]等、実施する教師の戸惑いが示された。

性教育は、国民運動計画である「健やか親子21」においても、「青少年の性行動が低年齢化・活発化し、また性情報に触れる機会が増大したという現実を踏まえ、(中略)充実することが必要である」(厚生労働省, 2000)とされており、その取り組みにおいては、学校保健にも期待がかかっている。しかし、中学校における性教育は、必修としてミニマム・スタンダードが学習指導要領で決まっている訳ではなく、全教科で取り上げるものという位置づけであり、また、具体化は自由裁量であるため、結果的に全く取らない学校も出てきてしまうことが指摘されている(橋本紀子, 2010)。対象中学校でも同様の状況があることが確認された。

一方で“現行の性教育は十分なものである”と評価した教師は、現行の性教育に自信を持ち、時間数、内容等も十分であると考えていた。＜現行の教育における内容の適切さ＞として[必要以上の情報はかえって心配][現行の知識ぐらいが丁度良いと考える]等の考えが示されたが、必要とされる情報の量・内容や丁度良いと考える知識について、何を基準に判断されているかは定かでない。教師間での見解が一致されているか、妥当な基準による判断であるか等、評価基準の明確化が必要である。また、＜科目教育の一部としての十分さ＞では、性教育以外の授業内容との兼ね合いから十分であるとの評価がされていた。この評価が、生徒の実態や実状を考慮した評価であるかは不明である。これら教師の矛盾する認識の原因について、今後明確にする必要がある。また、少数ではあるが[保健体育でしている]のでわからな

い][どのような内容を教えているかわからない]と
言った回答もあり、性教育に対する教師の関心の差
が示された。

4) 性教育の必要性

日常的な生徒との関わりを通して、性教育の必要
性を感じている教師は約6割であった。教師は生徒
の性に関する言動から、不適切さや認識の軽さを感
じ、性教育により、性に対する正しい認識をもつよ
うになることを期待していた。また、一部生徒の進
んだ性行動の現状を心配する一方で、他の生徒の[中
学生になっても平気で男女が抱き合っている][幼い
心の子が多く、社会への(社会へ出ていく心の)準
備ができていない]といった性意識の発達の遅さにつ
いて気にかけていた。思春期の生徒たちは一般的
に性への関心が高まる時期であるが、個人差がある
ため一様ではなく、教師が生徒個人の各発達段階に
合った性教育の必要性を感じていることが窺えた。

また、教師は、生徒のコミュニケーションスキル
が未熟なことや氾濫する性情報の中から正確な情報
を選択することの困難さについても教育の必要性を
感じていることから、中学校における性教育をから
だの成長・発達や男女の違い等の狭義の内容にとど
まらず、包括的に捉えていることが窺われた。

これらの結果から、教師は、セクシュアリティに
関するあらゆる事柄を含んだ包括的な性教育(=セ
クシュアリティ教育)の必要性を感じているが、実
践においては、からだの生理や仕組み等に限局した、
狭義の性教育の内容に止まっている可能性が考えら
れた。性教育は、学校教育活動全体を通じて取り組
むことおよび、それぞれの教科等の役割分担をより
明確にした上で、連携して取り組むことが重要であ
る(文部科学省, 2005)。しかし、実施する教師が限
定されており、実施担当者や性教育に対する意識の
高い教師の裁量に任されている結果、性教育に対し
て積極的な教師も、実施において困難感や戸惑いを
感じることにつながっている可能性がある。

2. 過疎地中学校教師のアンケート調査から得られ た、効果的なセクシュアリティ教育プログラム構 築への提言

学校での包括的性教育(セクシュアリティ教育)

は、「個人の生涯を通じたセクシュアル・ヘルスの礎
石になるもの」(PAHO,WHO, 2003)であり、その概
念は30年以上前から唱えられてきているが、未だ十
分に行えていない現状がある。今回の調査からも、
性教育を実施している教師の約半数が現行の性教育
を“十分でない”と評価していることが明らかになっ
たが、一方では約2割が現行の性教育を“十分であ
る”と評価しており、教師間で矛盾する認識があるこ
とが示された。この背景として、性教育の取り組み
の具体化が各学校の自由裁量であることや、必修と
してミニマムスタンダードが決まっていないことよ
る教師間の意識の差等の影響が考えられる。90年
代に行われた先行研究(山本他, 1991)においても、
学校で性教育が定着しない理由として、性教育の概
念や位置づけがはっきりとされていないことが挙げら
れており、また、家庭や地域社会の受入れの前提と
して、学校内で全教師が性教育の意義について正し
く理解し共通理解を図ること等が指摘されている。
今回の調査では、これらの課題が未だ解決されない
まま存在していることが再確認された。近年の社会
の現状を鑑みた時、学校におけるセクシュアリティ
教育の充実は必須であり、セクシュアリティ教育を
必修としてカリキュラムが整備されることが望まれ
る。

現行の性教育の実施内容については、学習指導要
領に準じた内容が多く挙げられた一方、包括的な内
容での実施もあり、担当する教師の意識の差により
内容が異なることが示された。また、教師は、生徒
のコミュニケーションスキルのための教育や情報教
育等、包括的な性教育の必要性を感じる一方で、実
践は狭義の性教育に止まっていることや、性教育の
実施に際して感じる困難感・戸惑いの内容は、狭義
の性教育の内容に限局していることが示された。これ
らのことから、教師が性教育実施に際して感じる
困難感は、主に狭義の性教育の内容についてであり、
性教育を包括的に捉えた場合、困難感が軽減する可
能性が考えられた。包括的な性教育には、コミュニ
ケーションスキル育成や情報教育の他、主体的な意
思決定ができるスキルや問題解決スキル・自己意
識・共感性の育成、情動やストレスへの対処等、多

岐にわたる内容が含まれる。教師が性教育を包括的に捉えることで、教育内容の幅が広がり、教師がそれぞれの専門性や得意分野を活かした実施が可能になるのではないかと考える。

今回、過疎地中学校の性教育の現状と教師の考えを明らかにすることで、思春期に親元を離れる子どもたちへの効果的なセクシュアリティ教育プログラムへの示唆を得ることを目的として本調査を行った。性教育の必要性を感じる理由として挙げられた内容は、過疎地ゆえの特徴的な内容ではなく、一般的に中学生に性教育が必要な理由として当てはまる内容であった。本来、性教育は、性行動のリスクの如何に関わらず、セクシュアル・ヘルス増進のために生涯を通じて提供されるべきものであり、教師は、生徒が親元を離れるという特別な状況下においてだけでなく、全ての中学生に対して、十分な性教育の必要性を感じているとの結果であることが考えられた。

しかし一方で、現在の性教育が生徒にとって“十分なものでない”と思う理由として、親元を離れてからの性行動に対する不安が語られた。このことから、過疎地の中学校教師は、生徒が親元を離れるという状況において、近い将来についてより切実な不安をもっていると考えられた。

本研究では、対象者の回答に対する詳細な探索ができないという、質問紙調査の限界があったことから、今後、教師へのインタビュー調査等、更なる調

査を実施し、効果的なセクシュアリティ教育プログラムの構築へとつなげたい。

文献

- 橋本紀子 (2010):『Sex Education』誌にみられる欧米の性教育の動向—中・高校生を中品に、教育学研究室紀要:「教育とジェンダー」研究, 8, 60-68.
- 厚生労働省 (2000): 健やか親子 21 検討会報告書.
- 文部科学省 (2005): 教育課程部会健やかな体を育む教育の在り方に関する専門部会資料.
- 日本性教育協会編 (2007): 「若者の性」白書-第6回 青少年の性行動全国調査報告-, 小学館.
- “人間と性” 教育研究協議会編 (2006): 新版人間と性の教育 性教育のあり方, 展望 1, 大月書店, 東京.
- PAHO, WHO (2000)/松本清一, 宮原 忍 (2003): セクシュアル・ヘルスの推進—行動のための提言, 財団法人日本性教育協会, 東京.
- 鈴木康江, 佐々木くみ子, 片山理恵, 前田隆子 (2005): 思春期性教育活動に向けての基礎調査—中学生, 保護者, 教師の意識調査から—, 母性衛生, 45(4), 512-517.
- 山本信弘, 大道乃里江, 戸田百合子, 小山健蔵, 須藤勝見 (1991): 性教育の歴史的変遷の文献的一考察, 大阪教育大学紀要第V部門, 39(2), 203-215.